【論文要旨】

1. 課 題

本論文は、日本の大正時代の作家である芥川龍之介の作品および中国におけるその翻訳・評論などについて、中国の文学・言語の具体的な文脈に沿って深層受容の諸相とそれらの要因を考察・検証し、それによって「中国」のありようを浮き彫りにすることを目的とする。

ここで、芥川の作品とその中国における受容を選んだ理由と、本論文で「中国」の「物語」を記述する方法について簡潔に述べておく。文学的にも思想的にも、芥川と同時代の中国人知識人との共通点は少なくない。「中国」を浮き彫りにするために、芥川の作品の中国での受容を検討するのはこのためである。具体的には、芥川作品の中国語訳を手がかりとして、現代中国語の変化とその要因を考察するとともに、芥川文学の中国における受容を通して、「中国」が語られていく文脈を検討することが主題である。このことは、「中国」という社会コンテクストに基づいて、芥川研究をこれまでのモデル（すなわち、芥川中心の研究モデル）から解放し、もっと広い視野において芥川文学の研究を実現することにもつながる。

2. 論文の構成

序章
1. 問題提起
2. 論文構成

第1章　「羅生門」の中国語訳と三人称代名詞の近代的変遷

第1節　「対訳」と近代中国語における女性三人称代名詞の成立－魯迅の訳した「羅生門」における三人称代名詞の処理を問題に提起—

0. はじめに
1. 「それ」と「その」を「他」と「伊」に訳した背景
2. 翻訳語として生まれた女性三人称代名詞
   - 2.1 女性三人称代名詞「伊」の由来について
   - 2.2 「她」という字について
3. 「他女」がもたらしている新しいこと
   - 3.1 「新婦」としての「他女」
   - 3.2 西洋の市民社会における主人公
   - 3.3 三人称の新たな変化
4. 「対訳」の重要な意義
5. おわりに

第2節　「她」が「伊」を凌駕した理由について—翻訳の漢字新造語および現代中国語の口語の視点から—

0. はじめに
1. 漢字の表意システムにおける新しい変化
2. 人々が新名詞を受け入れる媒介
3. 「伊」と「她」が使われている文脈
4. 朱自清「你我（あなたわたし）」における三人称代名詞「他」
5. おわりに

第3節　「羅生門」の中国語訳に出現する三人称代名詞—魯迅訳ほか四種の代表的な中国語訳を対象に—

0. はじめに
1. 各訳文のなかに出現した三人称代名詞の様相
   - 1.1 魯迅の訳文
   - 1.2 呂元明の訳文
   - 1.3 魏大海の訳文
   - 1.4 林少華の訳文
2. 各訳文の整理・分析の結果

第4節　語り手と「他」と訳された「この男」—物語言説の分析を方法に—

0. はじめに

1. 「羅生門」の語り手
2. 「この男」についての言説分析
3. おわりに

第2章 芥川龍之介の中国題材の作品をめぐって
第1節 他山の石—夏丏尊が訳した「芥川龍之介氏的中国観」を読む—
0. はじめに
1. 夏丏尊が翻訳した「芥川龍之介氏的中国観」
2. 「修言竟是人家國，我亦書生好感時」
3. 他者からのまなざし—芥川が訪問した章炳麟氏・鄭孝胥氏・辜鴻銘先生
4. 中国の現実から歴史の「できごと」に辿って
第2節 日本人ジャーナリストにとっての「中国大衆像」—1920、30年代の芥川龍之介、清水安三、橋樸を中心に—
0. はじめに
1. 国家の存亡について
2. 中国人の人文主義
3. 妓女と「闇の女」
第3節 「南京の基督」論の彼方へ
0. 中国における「南京の基督」のある読み方
1. 金花は軽蔑されているのか
2. 金花一人の恋
3. 「天国の夢」に託されている金花のファンタジー
4. 金花に投げられている難問
第4節 「湖南の扇」に潜んでいる芥川の中国認識
0. はじめに
1. 日本旅行者「僕」と譚永年
2. 「小事件」
2.1 玉蘭に出会う
2.2 モダンガール林大嬌
2.3 「僕」と譚との心理対決
2.4 玉蘭の登場—「小事件」のクライマックス
3. エピローグに潜んでいる作者の中国観

第3章 翻訳者と研究者が「みる」芥川龍之介
第1節 翻訳者が翻訳集の序跋で語る芥川龍之介のこと—中国大陸における芥川龍之介作品の9種類の翻訳集を対象として—
0. はじめに
1. 翻訳目的について
2. 芥川自身と中国との関連
2.1 芥川の人生について
2.2 芥川の文芸観
2.3 芥川の死と余韻
2.4 中国との関連
3. 翻訳について
第2節 芥川龍之介の「死」と二十世紀の中国文学
0. はじめに
0.1 関連する先行研究について
0.2 大陸と台湾における芥川の死に対する評価の分析結果
1. 中国では「敗北の文学」とみなされる背景
2. 「近代的自我」と時代的運命
3. おわりに
終章
参考文献
謝辞
付録

3. 論文の概要

3-1. 「羅生門」の中国訳と女性三人称代名詞（1920~30 年代）

第 1 章では、魯迅が翻訳した「羅生門」における女性三人称代名詞の処理を問題提起とし、翻訳と主体文化との相互影響という視点のもとで、近代以来翻訳語として出現している女性三人称代名詞について考察した。

古代日本語と中国語との翻訳上の密接な関係や、近代以来西洋語「She」に対応するための女性三人称代名詞の提唱はアジア的な現象である。女性三人称代名詞は、翻訳上の意義だけではなく、仕事しながら独立した一生を目指す新しい女性の価値観とライフスタイルをもたらした。三人称代名詞単数を主人公とすることは、近代西洋小説の特徴的な手法である。三人称代名詞の男女区別、西洋小説の流行によって西洋小説の手法はしだいに中国文学の分野に入り込んでいる。1910 年代の中国において、翻訳は中国の言語と文学この二つの領域で先駆性と創造性を帯びていた。

当時、魯迅、周作人によって提唱された「対訳（逐語訳）」という翻訳方針は多くの翻訳語の誕生を促した。翻訳語によって持ち込まれた多くの新しい概念・思想は、翻訳テクストを通じてしだいに中国文化の系統に入り込み、人々に影響を与えるようになった。内容の豊かな翻訳語がいかに主体文化のなかで影響するのか、このような事例を通してその翻訳語に含まれている概念・思想、そして異なる文化間の交渉・妥協のやりとりを考察することができる。とくに、翻訳を歴史文化という社会的なコンテクストにおいて考察することは、翻訳という視点から近代以来中国語、中国文学の変化と発展の意義を考え直すきっかけとなる。

翻訳によって、新しい概念・思想が受け入れる側の文化に持ち込まれるとすれば、持ち込まれる異質的なものは受け入れる側の文化において、いかに受け入れられるか。すなわち翻訳語は、主体文化においていかなる規範や環境の影響・制約を受けるのかということである。これは、翻訳研究をするとき考えなければならないことの一つである。

「她」と「伊」は、女性三人称代名詞が中国語化されるとき検討された二つの候補である。こうした翻訳は異質なものが主体文化に入った後で起こる具体的な変化・発展を考察するのにふさわしい研究対象である。

近代の翻訳における漢字造語の観点から、女性三人称代名詞の「她」と「伊」の字形の意味作用を見直した。漢字文化と西洋文化の間の巨大な差異と相互の妥協のなさのために、西洋語の翻訳語としての新名詞は、従来の漢字造語の習慣だけに頼って造ることはできない。新語は、漢字文化と西洋文化の懸け橋となっている。多くの場合、新名詞は、従来の漢字の表意システムに従うことができない。一方、こうした新名詞においては、漢字表記のために、新たな価値と概念の伝達が妨害され、原語の意味の一部はなくなる。

人々が翻訳の新造語を理解し受け入れたときの主要な媒介は、当時の新名詞が使われた翻訳文あるいは強調されている文脈だった。女性三人称代名詞の普及に関しても、その当時「她」と「伊」がどう使われていたか、その実情を調べる必要がある。そこで、1921-1922 年に『小説月報』で発表された作品を考察した。考察の結果、「她」と「伊」が多く使われた理由は、三人称単数を主人公とする西洋小説の手法を応用するためか、あるいは「彼」（他）との男女の違いを区別するためであった。そして、作者たちのこの新代名詞に対する理解の違いによって、「她」や「伊」の採用が異なっていた。

ところで、ほとんどの場合、三人称代名詞は人名の代わりに使われている。「她」と「伊」の使い分

けは女性三人称代名詞が出現する以前前後の文脈あるいは人物関係によって男女を明かす方法によるよりも、確かに文章表現上の簡潔さと明確さをもたらしている。女性三人称代名詞はこれらの文学作品（書き言葉）によって、人々に浸透し、受け入れられるようになったのである。

1933年、朱自清は口語における人称代名詞を論じる文章(朱自清「你我」、『朱自清文集』第二冊、開明書店、1953年3月、280-297頁、280頁)で、「他」を依然として三人称代名詞の総称とみなしている。言い換えれば、口語における三人称代名詞は、男女で区別されていなかった。朱自清は、文章の最後で三人称代名詞「他」を男女と物の三種類に分けることは、書き言葉においては意味があるが、口語では必要がないと明言している。朱自清の見解を合わせると、1923年頃女性三人称代名詞として確立した「她」が持っていた最も重要な意味は、書き言葉において、「他」との使い分けによって男女の区別をすることであった。人々が書き言葉においても口語においても女性三人称代名詞「她」を理解し、認知する基礎は、やはりすでに長く存在している「他」の影響によるものである。言い換えれば、「她」が「他」と同音であることは、「她」が人々に受け入れられた大きな理由であったと言ってもよい。これは、前述の黄興濤が述べた「她」の採用理由の一つと一致している。ところが、使われている文脈と口語の影響によって、「她」の意義と概念は、単純化されている。すなわち、「她」が書き言葉において、「他」と区別されるだけになり、従来の三人称代名詞の固有の意義に回収され、新名詞としての新たな意義と価値は、ある程度無視されることになった。中国語における女性三人称代名詞の「她」が確立したことは、新旧文化・価値が相互に妥協し合った結果なのである。

女性三人称代名詞の誕生は、東アジア漢字圏における新現象だったと言ってもよい。日本語における女性三人称代名詞「彼女」も、韓国語における女性三人称代名詞「그녀」も、西洋語への対応によって生まれたものであった。以上の考察と黄興濤などの先行研究を踏まえ、現代中国語における「她」と「伊」の「争い」は、近代以降の中国における新旧文化・価値の間の衝突・妥協・融合などあらわれだといえる。ゆえに女性三人称代名詞ないし三人称代名詞全体の使用上の変遷を整理し分析することは、特に近代以降の中国でいかなる変化が起こっていたかを探求するとき、重要な意義を持っている。

3-2. 「羅生門」の中国語訳における三人称代名詞（1980年代翻訳との比較検討）

女性三人称代名詞の出現は、中国語の三人称代名詞に構造的な変化をもたらした。従来、三人称全体の代名詞であった「他」は現在では男性三人称代名詞となり、「她」が女性三人称代名詞となっている。「他」の用法は制限されている。

「羅生門」の中国語訳を年代順で考察してくると、三人称代名詞が、男女いずを指す場合でもしだいに頻繁に使われるようになっている。第1章第3節では、魯迅の翻訳文と各翻訳の繁栄期に現われるほかの三種類の翻訳文を揃え、三人称代名詞の使用状況を整理し、そして現代中国語における三人称代名詞の変化と合わせて分析した。

1920年代に翻訳された魯迅訳と比べ、1980年以降に翻訳されたほかの三種類の訳文、とりわけ呂元明訳と魏大海訳ではそうした埋め合わせが明らかに多く、この二種類の訳文における三人称代名詞の使用上の主な特徴になっている。これらの訳では、三人称代名詞の使用によって、人名或いは呼称の繰り返しを避けている。

もちろん翻訳者のスタイルにもよるが、全体的にみれば、現代中国語への翻訳のなかで、三人称代名詞の使用率が高くなってきているということを確認した。「羅生門」の訳文のなかに三人称代名詞が多

く用いられることは、前述の各訳文における具体的な理由のほか、現代中国語が西洋語とその翻訳語の影響を受けているという大きな時代的な要因にもよると考えられる。これは、朱自清が1933年発表した「你我」における現代中国語の口語における人称代名詞の使い方が、西洋語とその翻訳語の影響を受けているといったことと一致している。一方、三人称代名詞が具体的に男性の「他」・女性の「她」・中性の「它」を分かれて以来、書き言葉においては、その使われ方がさらに明確に効率的になっている。とくに1910年代以来、小説作品のなかでは西洋の小説における三人称代名詞の単数を主人公にするといった技巧を受け入れるにつれ、その使用率が大幅に増加した。これは、小説における新たな傾向であり、中国語における新たな傾向でもある。

このことは、現代中国語と中国の現代小説における三人称代名詞の使い方の密接な関係を裏付ける。さらに三人称代名詞そのものに、現代中国語における幾つかの変遷をみることができる。しかし、三人称代名詞の音が口語では全部同じであるため、三人称代名詞は、実際根本的な変化を起こしておらず、ただ書き言葉において、字形の区分をしたのみであるといえる。ようするに、もともと総称だった「他」が男性の「他」・女性の「她」・中性の「它」に分かれたということである。このような変化は、西洋語における三人称代名詞の性別ごとの語に対する対応であり、三人称代名詞の書き言葉における分化は、中国語の現代的な一面を示している。それにしても、なぜ書き言葉だけで変化があったのか、なぜ音声の面においては区別が生じなかったのか。当時、周作人が、女性三人称代名詞に「伊」を薦めたのは、その漢字の形と字義を重視するゆえではなく、音声上「他」と区別しようとしたためであった。結果的に「她」が「伊」を凌いで女性三人称代名詞として確立されたことに、人々が「她」を好んだ傾向をみることができる。

三人称代名詞は、言語の伝統を受け継いでいる。また、前述の現象を考察し、文法についての先行研究を遡ることによって、現代中国語における三人称代名詞が変化した原因は、新しい刺激を受けて起こった面もあれば、言語の内的な発展によって起こった面もあるということがわかる。こうして、三人称代名詞は、次第にわれわれの日常生活における書き言葉と話し言葉の表現において頻繁に使われるようになったのである。

三人称代名詞が頻繁に使われることはただ言語表現の問題だけではない。それは物語の語り方と視点に変化をもたらしている。「羅生門」において、「下人」と「この男」は実際同じ人物をさしているが、なぜ芥川は同一人物を違う呼称にしているのか。言い換えると、「この男」という表現はどのような作者の創作意図や、役割、表現効果をしているのか。これに答えるために、日本語の原文「羅生門」の語り手がどのような存在かを明らかにしなければならない。第1章第4節では、「この男」が出現している原文と、「この男」を全部「他」に訳している林少華の翻訳文の語り方と表現効果をテクスト分析で比較した。

「羅生門」の語り手は自己顕示的であり、そして読者への語り意識が強いが、全知全能の語り手ではない。このような「特殊性」のある語り手は新たな時代を迎えた日本文学とその文体にとって重要な意義をもっていた。藤井淑禎によると、「単一の『全知視点』あるいは単一の「一人称叙述」から脱出することは、新しい時代の文学と文体にとって意義あることだ」(藤井淑禎：《蒙太奇文体与詹姆斯、福楼拜》、《日本文学翻译论文集》、北京日本学研究中心文学研究室編、人民文学出版社、2004、221-231頁。日本語訳は筆者による)。翻訳文に原文と多少の差異が生じることはしかたがない。「この男」を「他」に訳したテクストの分析によると、原作における特定の呼称を通じで表現されているクローズ・

アップ技法（モンタージュ技法）の効果は、「他」に訳された翻訳文において失われていた。そして、「下人」と「この男」の表現の使い分けで表されている心理的な葛藤は「他」に訳されることによって色あせている。むろん、翻訳文の処理は翻訳者による原作への独特な理解の結果を表している。他方、「この男」が「他」に訳されることは現代中国語において三人称代名詞が頻繁に使われるようになったこととかかわっていると思われる。三人称代名詞が頻繁に使われることは、書き言葉における三人称代名詞の男女の区別がもたらした変化の「副産物」の一つといえる。また、女性「她」・男性「他」・「它」の普及は現代小説において三人称代名詞が頻繁に使われることと密接にかかわっている。結果からみれば、三人称代名詞は現代中国語の書き言葉と話し言葉において頻繁に使われている。

人々はしばしば翻訳を通じて新しい小説の技巧を導入する。小説の翻訳においては、もとからある文学の効果が失われたり、多少の差異が生じたりすることが頻繁にある。物事はつねに矛盾のなかで新しく成長しているうちに物事自身が持っている豊富性と複雑性を呈している。翻訳を深く理解しなければならない、しかし翻訳や翻訳によってもたらされる結果にたいする認識と解釈はまだ十分ではない。

翻訳を受け入れる側の言語研究と合わせて考察することで、翻訳活動と主体文化・言語との間の比較的長期的な影響関係を観察することができる。これは翻訳研究を深くするとき、考慮すべきもう一つのことである。第1章の第3、4節で行った二つの検証事例を通して、文化間の架け橋としての、翻訳がもつ可能性と限界がうかがわれる。

3-3. 芥川の「中国観」について（第2章第1節）

1912年1月、南京に臨時政府が成立、孫文が臨時大総統に就任、この年を中華民国元年とした。偶然の符合であるが、同年の7月に、日本は大正に改元される。清朝の滅亡は弊害累積の旧制打破であったが、共和制という新国家体制は中国の情勢をすぐ安定することができなかった。中華民国という「新しい支那」は同時代の日本人にとっては「動く支那」でもあった。

明治維新の後、中国大陸を旅行し、その実情を見ることができるようになると、日本人による中国の旅行記が多く書かれた。たとえば、岡千仞『観光紀游』（旅行は明治17年）、内藤湖南『燕山楚水』（旅行は明治32年）、夏目漱石『満韓ところどころ』（旅行は明治42年）などが挙げられる。

しかし、当時の中国からショックを受けた人は少なくなかった。中国旅行記は、当時の日本人が現実の中国に対して抱いた複雑な心境を反映している。竹内実が言うように、「社会も、政治制度も、弊害累積なのであって、漢詩漢文をつうじて憧憬と親近感はもつが、日本の近代化を誇りとする立場からは、中国を時代おくれと断定してはばからない。こうした中国像の構造は、こんにちまで一貫してつづくのである」(竹内実著：「大正期における中国像と袁世凱評価」、『袁世凱と近代中国』（ジェローム・チェン著、守川正道訳）、岩波書店、1980、340頁)。これらの中国旅行記は中国で紹介されなかったために、中国人にすぐに知られることはなかった。

中国の新聞・雑誌において、日本人の中国旅行記が初めて話題になったのは、1926年（大正15年）のことだった。夏丏尊は、『小説月報』（1926年4月発行、総17巻第4号）に「芥川龍之介氏的中国観」（芥川龍之介氏の中国観）という題で、芥川龍之介『支那游記』の一部を翻訳・掲載した。芥川龍之介は、中国を旅行し、帰国後「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」を次々と書いて発表した。これらの旅行記をまとめた『支那游記』は、1925年（大正14年）11月3日に改造社から刊行された。

芥川の「中国観」が発表されると、注目が集まり、中国の知識人を中心に討論が起った。その後、芥川の『支那游記』は今日まで中国で論じられている。しかし、興味深いことに、翻訳者である夏丏尊の意図はあまり理解されていないようである。その理解されなかった背景を探るために、当時の中国情勢を追って、夏丏尊が芥川の「中国観」を理解し、翻訳した社会コンテクストを辿った。

芥川は当時の中国の厳しい状況を実体験で認識しながら、この厳しい現実に対する太平楽を唱えている中国の老若男女や、自分たちと深い結びつきをもつ文明のあるこの老大国への幻滅を、彼の怒りのよりどころとしたと推察される。翻訳には中国の現状を厳しく認識していた有識者の夏丏尊が、列強と軍閥支配者のもとで激動する社会状況、国家の危機を意識しながら、共感できる芥川の中国観を選択し、国民の反省と覚醒を求める過程が表れている。今関天彭の詩「修言竟是人家國，我亦書生好感時」は、芥川や夏丏尊が当時の中国の状況に抱かれる感慨を的確に表すものと思われる。

また、章炳麟氏・鄭孝胥氏・辜鴻銘先生についての記述は全て翻訳されている。訪問されたこの三人は政治を除き、それぞれ学問・実業などの分野で成功を収めている。彼らが芥川という「他者」の眼にどう映ったのか、中国人には興味深いことである。芥川が三人と会見した内容を夏丏尊が詳細に翻訳しているのもは、恐らく外国人としての芥川が当時の中国の人物をどのように理解し、取り入れ、さらに評していたのかに興味を抱いたからだと思われる。また、これらの記述によって、当時の中国の問題を考える手がかりを提供できればという思いもあったであろう。

中国の古典に詳しい芥川が当時の中国の内戦から歴史の「できごと」を辿って書いているのが特徴的である。水滸伝に秘められた豪傑の意識は善悪を脚下に蹂躙する一種の超道徳思想であり、その心もちこそ民衆が水滸伝を愛読する理由であると、芥川は指摘している。夏丏尊は、芥川の独特な見解を理解できたからこそこの内容を取り上げたと思われる。

芥川は、『支那游記』のなかで自ら中国の民衆への関心を示している。「斷橋、孤山、雷峰塔、一それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである」(芥川龍之介：「西湖（四）」、『江南游記』、『芥川龍之介全集　第5巻』、岩波書店、1977、217頁)。上海に上陸した後彼が初めて見た怪しい人相をしている車屋、観光地の池へ立小便をしている中国人男性、これらの実体験による描写を読んでいくと、中国の民衆が芥川に見せているのは決して良い一面ではないといえる。

さらに、芥川の中国の民衆像の意味を広く見ていくと、『支那游記』は当時の日本で人気があって大変売れているということである。彼が書いた中国の民衆のイメージは、日本人に印象深いものだけではなく、さらに日本人の中国観の一部となっていると考えられる。また、芥川は『支那游記』の「自序」で、自らジャーナリストと称している。本論文は、同時代の他のジャーナリストそして中国通といわれる、当時の中国で長年活躍していた清水安三、橘樸の中国大衆像も取り上げ、三人の中国大衆像を対照比較した。この三人の著作がいかに中国の民衆像をとらえているか、その相違については、それが生じた背景を追った。三人の国家存亡の危機についての内容を比較・考察すると、芥川の「長閑さ」、清水の「神経は實に太い」、橘の「国家意識」の覚醒という中国の民衆像は、あくまでそれぞれ異なる視点と文脈のもとで形成されたものではないかと思われる。とにかく、アヘン戦争以来の日本人から見た20世紀前半の中国社会の激動の表現と考えるべきであろう。今日においても中国に対する評価は分かれているといえる。

芥川は、「男女は斷じて同席することを許さず」ということに気づき、彼の鋭い観察力が示されてい

る。さらに興味深いことに、そのことは中国人の形式主義と呼んでいる。「男女七歳不同席」という決りにこめられた旧道徳と旧生活態度への服従の意志だけではなく、その旧道徳と旧生活態度をよりどころにした折衷主義の変化も注目したい。その変化を表しているのは、清水が挙げている「太古とモダーンが雑居」した例である。その極端から極端へ奔る中国人は、その時代に自ら折中主義を破壊しつつあったのではないか。橘が言うように、「折中主義が支那の社會に偉大な勢力を振つて居ることには、頗る深く且つ遠き原因がある。其れが為に進歩の停滞すると言ふ弊害を免れぬが、併し一面に於ては闘争を避けて物事を平和に處理し得ると言ふ長所もある。随つて支那人の折中主義は善くも悪しくも他國人の批評を超越した處の存在である」（橘樸：「支那兒童心理の研究—彼等に現はれる支那民族氣質」、『月刊 支那研究』第1巻第4号、1925年、90頁）。20世紀前半、中国文化は伝統と外来の文化の間に新しい兆しを見たと思われる。

芥川龍之介、清水安三、橘樸の中国に対する記述や論述の内容はこればかりではないが、当時の時代的特徴を考え併せて、上記の三つの面から彼らが認識していた中国の民衆像を読み取ってみた。芥川の『支那游記』が彼の旅行中の体験に基づいて、中国の実態に驚愕しながら、中国をいくらか読み直す試みであったことは読み取れる。しかし、清水や橘の中国に対する観察や論述と比べてみると、彼の中国観とくに中国の民衆に対する記述は少し影を潜めている。その土地で生きている民衆のイメージについてはその裏付けが十分でないために、空疎な記述になっているところが少なくない。端的に言えば、それに代わって、近代以来の日本の中国への軽侮の念が強固なものとして作り上げられる。『支那游記』は、芥川の客観的かつ感性的な体験談であるが、他方冷酷な一面もある。

芥川の『支那游記』は決して中国を中傷し、軽蔑しているものではない。しかし、中国における芥川の「中国観」の受容は、単に『支那游記』の内容から判断されるだけではなく、過去の両国の戦争経験や、さらに辿ってみると明治以降の近代日本の中国像、中国観と大きくかかわっている。竹内実によると、図式化していえば、明治以前と以後では、日本の中国にたいする対応は大きく変化し、明治以後、中国崇拝が西洋崇拝にきりかえられるにともない、中国への軽侮の念が一般化したからであるという(ジェローム・チェン（陳志譲）著、守川正道訳：『袁世凱と近代中国』、「大正期における中国像と袁世凱評価」（竹内実）、岩波書店、1980、337-376頁、339頁)。近代日本で形成されたこの「一般的」な中国像、中国観は、中国でもいろいろな形で読み取れるようになっている。それは芥川作品の作品論から日中のさまざまな分野の交流に至るまで、広い範囲で多かれ少なかれ負の影響を与えているといえる。

3-4. 中国を題材とする作品の論じられ方（第2章第3、4節）

芥川の「中国観」に対する消極的な見方は、芥川龍之介作品の作品論にまで影響している。中国題材の作品「南京の基督」はその影響を受けた作品の一つである。先行研究においては、日本人旅行者あるいは日米混血児を金花の啓蒙者と読み取るものが少なくない。また、「南京の基督」における中国描写にから、芥川の中国認識を読み取るものもある。

たしかに、芥川の作品には隠喩が多いので、作品をさまざまな角度から理解することができる。「南京の基督」に中国の隠喩を読み取る可能性が十分あると思われる。しかし、このような読み方は中国研究者自身のイデオロギーにかかわるかもしれない。

テクスト細部の分析を通して、若い日本人旅行家、金花、日米混血児との関係を読み直してみると、

日本人旅行家は金花の信仰を疑うが、金花を軽蔑するのではなく、かえって彼女に同情していると読み取ることができる。それ故、日本人旅行家と金花との間に、啓蒙者と被啓蒙者の関係は成立していない。

金花の部屋に飛び込む外国人は、基督の顔に似ているので、金花に親しみを感じさせ、さらに金花に恋心を抱かせる。その外国人と金花は言語で交流できないし、金花が身体を売っているという前提があるので、外国人はただ金花と一夜を明かすことを求める。だからこそ、金花と外国人はほかの形で交流することができない。金花は天国の夢をみて、その外国人は、金花の病気を治るために基督から派遣された「南京の基督」だと思う。金花がこう思わなければならない理由は、自分の罪悪（楊梅瘡を客にうつすこと）を最小限にし、自分の心のバランスを取るためである。ところが、基督が客として金花を助けにくるという考えは、非常におかしなことである。このおかしな考えと金花の「天国の夢」は明らかな照応関係にある。すべては、金花が自分を慰めるための想像である。

日本人旅行家と金花との再会の部分で、芥川は読者に一つの問題を提起している。つまり、心のバランスを取ることは、人間の理性とどこまでかかわっているということである。真相が分かりさえすれば、人間はもっと幸せになるのか。これは作者が金花の物語を通じて、日本人旅行家と読者に提起している難しい問題であろう。理性を疑うこと—これは作者が表現しようとした主題であると思われる。理性主義の盛行な大正時代に書かれた「南京の基督」は、芥川が人生を考え理性を疑うというテーマを表現した作品の一つではないかとみ思われる。

「湖南の扇」は芥川の中国旅行後の作品であるため、芥川の中国体験・手記・当時の中国社会への認識などから読み取る先行研究が少なくない。テクストに沿って、譚永年、「僕」、玉蘭、黄六一、林大嬌、含芳のそれぞれの関係を分析し、作者がここで表現しようとしたのは、自己反省という主題や実体験からの想像ではなく、現実的な中国認識であることを明らかにした。

たしかに、「湖南の扇」における桟橋の風景や妓館の描写、芸者の描写は芥川の『支那游記』における見聞の描写と酷似している。これらは、作品の描写に現実性をもたらしているといえる。この作品は芥川作品の「詩的」な精神と現実描写とのバランスが取れた作品の一つである。中国題材の作品を論じる上でも、中国との関連を大前提として考えるのではなく、テクストの分析と合わせて作品を論じる手がかりとしたほうが有意義ではないかと思われる。

3-5. 翻訳者と研究者が「みる」芥川龍之介（第3章）

芥川の作品は中国で90年以上の翻訳史がある。翻訳者による芥川自身と彼の作品への理解は中国における芥川文学の受容と大きくかかわっている。それを理解するために、中国大陸で出版されている翻訳集の翻訳者に書かれている序跋を整理し、分析した。

序跋の考察結果に基づいて、筆者は以下のように考える。

一、翻訳集の出版時期を俯瞰すると、2000年以降出版された方が多い。その原因は出版・翻訳事業が盛んになったからであると思われる。出版・翻訳事業の繁栄による翻訳集の大量出版、翻訳集の商品化、出版ジャーナリズムの成立といった条件を考えれば、この時代には翻訳に携わる者、翻訳自体に対する専門意識が高くなりつつあると考えられる。

二、翻訳目的についての考察の結果から、新中国の成立後、出版社と研究者という翻訳出版の形式がしばしば出現し、その場合翻訳者の身分は日本文学研究者・大学教授である。このような背景のもと、翻訳者が文学に対するアカデミックな視点から序跋を書くのは当然である。

三、各序跋の見解には多くの一致がみられる。前述のように、今回考察してきた序跋はほとんど日本文学の研究者・学者等によって執筆されているので、文学性と学術性が高いといえる。その一方、同じような身分で似通った立場から考えるので、序跋の構造と内容は似たりよったりのものが多いようにみえる。特に芥川龍之介の人生と文芸観についての記述には、日本における芥川の研究と酷似した内容が多くみられる。

四、中国そして世界に見られる芥川作品の解釈はそれほど言及されていない。文潔若が書いた通り、隣国の韓国や欧米でも芥川の作品の翻訳集が多く存在し、各国での研究も盛んになっているので、芥川文学はすでに世界文学の一部になっていると言える。新中国における出版・翻訳の状況は一部の序跋で言及されているものの、芥川文学の中国での受容或いは芥川の作品に対する新たな見方等についてはほとんど触れられていない。

五、序跋において、翻訳者が翻訳方針や具体的な翻訳処理について言及するのはやむを得ないことである。筆者が、以前、芥川の短篇小説「鼻」の 13 種類の中国語訳を比較し分析した際、誤訳や不適当な表現等の翻訳の問題を除外し、ただ翻訳文の文体に注目すれば、それに影響を及ぼす要因は翻訳者自身の翻訳方針やその方針による言語的文化的差異の処理・政治・イデオロギーであると結論するに至った。翻訳者は自らの翻訳作品に「訳者序文」、「訳者あとがき」を付けて翻訳の苦労や工夫それに自分なりの方針について語ると思われるが、実際今回の考察の結果によると、翻訳者は翻訳のアカデミックな見方を序跋で示すほうが希少である。

芥川が 1927 年 7 月 24 日に自殺すると、日本の新聞・雑誌において大きな話題になった。彼の死は、当時の中国の知識人の間でも大きな反応を引き起こした。芥川自身は、「或旧友へ送る手記」という文のなかで、自殺の理由を述べていたが、周密をきわめた芥川の自殺計画には、本当に破綻はないのか。彼の自殺は、社会に衝撃を与えただけではなく、芥川研究の課題として研究者の間でも長く論じられている。本論文では、1979 年以降の中国大陸で出版された芥川龍之介作品の翻訳集に翻訳者が書いた序跋における、芥川龍之介の死因、彼の自殺に対する評価と「余韻（死後の影響）」の見方に注目した。さらに、用いられている表現を分析して、関連する他の資料も参照しながら、芥川の同時代の中国文学という文脈の中で、現在の評価の受容の背景をさぐることを試みた。

本論文では、芥川龍之介の死をめぐる二十世紀の中国文学における受容には、時代と社会制度の影響が大きいことを確認した。その上で、従来の芥川龍之介の作品の翻訳と受容研究の文脈ではあまり注目されなかった、芥川と同時代の中国の翻訳者がそれらを翻訳した動機を、周辺の資料とともに精読し、芥川の作品が、当時の日中両国の共通した時代状況を背景に、両国の知識人の相似した精神と思想の下で翻訳されたことを明らかにした。当時の両国の文化をになうエリート層は、それぞれの国の封建道徳・封建勢力などに反対しながら、新しい時代（マルキシズム時代）の到来を準備した時代の先駆者とも言える。

従来の芥川の翻訳と受容の研究は、二十世紀の中国文学の既存の文脈の上で、重要な翻訳者のみを対象にする傾向が強く、本論文のような視点は取りこぼされてきた。また、1979 年以降の評価のなかで、高慧勤は、芥川の作品の「人間性」という主題は、直接には「近代的自我」の面から評価されていないが、実は芥川の作品をはじめ広く日本近代文学の「近代的自我」から、改めて鑑賞する視点として、きわめて意識的に伝統的な日本近代文学の見方からの脱却が示唆されている。

翻訳者の作者や原作に対する理解・評価はまた翻訳と主体文化との間の相互作用の具体的な表現の形

である。翻訳は文化的な影響を生じさせうるか、生じさせるとすればそれはどのような影響か。この問いは、言語の変換の問題よりも主体文化によってそれがいかに制約されるかやその翻訳物がどう受け入れられるかという問題にかかわっている。主体文化の側から翻訳研究を行うときには、言語・文学・思想・歴史など統合的な学際的な視点をもたなければならない。

【審査結果】

公開審査は2016年6月25日に開催された。

本論文は、芥川龍之介の人と作品の中国での受容をテーマとしているが、その内容は大きく二つに分けることができる。一つは、女性三人称代名詞成立にかかわる現代中国語（書き言葉）の問題を芥川「羅生門」の中国語訳（とくに魯迅による翻訳）を手ががかりとして考察した部分（主に第1章）、もう一つは、『支那游記』をはじめとする同時代中国を題材とする（もしくは同時代中国を意識して書かれた）作品、および彼の死が、中国でどう受け止められたかを論じた部分（第2章および3章）である。その両面において、劉芳の関心は一貫して芥川を介して「中国」が語られていくアクチュアルな場にあり、なかんづく、翻訳という行為と新造字(語)「她」優勢化の経過との関連を丹念に追った第1章は、本論文の最大の特徴となっている。その意味では、この部分は、芥川龍之介研究としてよりはむしろ現代中国に関する言語文化研究の一ケース・スタディーといったほうが適切かもしれない。

それは、本論文の意義であるとともに、弱点をも示唆する。他の日本人作家に比べて芥川の中国語訳が突出して多いのは事実であるが、現在までの芥川作品の中国語翻訳史を集成してその序跋からうかがえる翻訳者の翻訳方針ないし姿勢をまとめた第3章第1節は、公開審査においても指摘されたように、作品選択の細部にわたる検討がなされておらず、結論も平板である。また、夏丏尊による『支那游記』部分訳（1926年）を取り上げ、あわせて当該書に見える芥川の中国民衆像を清水安三、橘樸のそれと比較して論じた第2章第1、2節は、同時代中国にとっての『支那游記』のアクチュアリティを指摘することにおいては説得力をもつものの、芥川論としては彼の「Journalist」態度を素朴に肯定しすぎる面がある。

劉芳は、もともと翻訳論に対する興味から柳父章氏の諸著作に導かれて日-中翻訳研究を志し、日本に留学した。数多い芥川作品中国語訳を検討する中で人称代名詞の問題に着目し、あらたな「中国」（ここでは書き言葉）が生成されていく過程を第1章の諸節にまとめた点は評価でき、同じ方法論で芥川作品を読み、彼の人生（自殺）を見た中国知識人じしんによる「中国」の問題化を論じたことにも一貫性と一定の意義が認められる。上述したような課題は残すものの、それは本人の自覚するところでもあり、今後の深化が期待される。

以上の評価に基づき、審査員一同は一致して劉芳に博士（文学）の学位を授与することが適当であると判断した。